

認識主觀の問題 (承前)

田邊 元

五

前節までの所論に由つて余の大體明にして得たと思ふのは次の諸點である。第一、批判的論理主義を純粹に徹底するとき、認識主觀としての意識一般は現實の個人的判斷意識に對する規範、理想となり、意味形式(範疇)と意識内容(範疇材料)との相屬性 *Zusammengehörigkeit* としての眞理性を判斷に於て決定する爲めの標準として豫想せられなければならぬ所の、兩者の本來的絶對融合 *Zusammen* の理念を認識の對象性の根據としての側面からよりも寧ろ判斷意識の規範といふ側から觀たるものである、第二、斯かる理念としての認識主觀はそれ自身現實意識を全然超越する所の意味の全體の統一を具有するものであるが、併しそれが現實意識の規範となり、超越的當爲を通じて後者により實現せられんことを求むるものたる以上、實は現實意識に何等かの意味に於て内在し之と相交渉するものでなければならぬ。而も本來超越的な

るものが新に始めて内在的となると解しては、意味形式の意識内容に由る限定、兩者の相應の如何にして可能なるかを理解することが出来ないから、形式たる範疇と内容たる範疇材料とは本來絶對に分離して相互孤立的に存立し、後に此が新に結合して認識の對象を構成し、又其對象性に對應するものとしての認識主觀の理念設定に導くといふ如くに考ふべきではなく、兩者の本來的融一が現實意識の彼岸にあるのでなくして其奥底に潜在すると考へて、兩者の分裂が現實意識の判斷内容を成立せしめ、其還元歸一がこれに對し超越的なる規範となり又對象となるのであると解さなければならぬ。第三、右の如き範疇を意味成立の *sine qua non* として、之をそれに相應する範疇材料から分離し、其意味相互關係を明にすることに由つて認識の對象性を基礎附けすると考へるのが先驗論理學の立脚地であるが、これは認識の對象を明にすることが出来るとしても、對象の認識を明にすることが出来ず、加之其意味形式自身の根據或は由來をもそれだけでは示すことが出来ない。我々は更にそれ等の意味形式の成立する由來を直接原始意識に就いて理解し、而してそれ等の意味形式が内容と本來不離に融一するものであつて、却て兩者を區別するのは反省的抽象の結果なることを直接意識に於て認め、此本元に還るのが即ち對象の認識に外ならざ

る所以を了得しなればならぬ。之を先驗心理學の立場とする。其方法は直接に原始意識を分析して其要素を明にし、それから事實上如何にして對象の認識が成立するかを明にするものではない。假に斯かる方法が可能であるとしても、これでは先驗心理學の先驗心理學たる所以を發揮することが出来ぬ。然らずして先づ先驗論理學の立場を豫想し、之を指導として、それが明にする形式に由つて意味附けられたる有意味内容を還元的に原始意識に於ける由來起原から理解しやうとするものである。換言すれば意味を内在せしむる原始意識を意味の方から溯源的に分析記述しやうとするのである。其故先驗心理學は單なる現實意識の學ではなくして、Anschauung に於ける意識一般と考へられる限りの意識の學である。勿論斯かる意味に於ける意識は單に極限たるに止まるであらう。併しとにかく此様な理念を其認識の嚮導觀念とするのが先驗心理學でなければならぬ。余が其方法として主觀化再構成を言つたのも此意である。斯かる還元の立場から意味内在の現實意識を分析記述する先驗心理學に由つてのみ認識主觀の問題は其全體的な解明を期する事が出来るのであらう。余は右の如き考を本にして更に研究を進めて見たいと思ふ。

今述べた如く意味形式と意識内容とは本來融合すると考へらるべきものであつ

て、前者はもと後者に内在し、後者は又本来前者を含蓄すると解さなければならぬ。勿論意味形式は意識内容に内在すると否とに拘らず、それ自身妥當する一般的有價値形象であるけれども、それが具體的なる意味を成立せしむるには、意識内容に内在することに由つて限定を受けなければならぬ。意味形式は意識内容に限定せられて始めて現實の意味を成すことが出来る。而して斯かる意味形式を純粹論理學の對象として思惟することも、實は半面に意識内容に對する關係を豫想するのてなければ不可能なのである。ラスクも認めた通り、形式を種別分化せしむる契機は *das Geltende* そのものにあるのでなくして、却てそれが關係する材料の方にあるのである (Lask, *Die Logik der Philosophie und die Kategorienlehre*. S. 57 ff.)。リケルトの如く本来それ自身に於ては何等先驗的の意味形式を含まざる内容があつて、これが意味形式と結合することに由り前者が後者に内在するに至り、之に由つて具體的の意味が成立するといふ考へ方では、意味形式の意識内容に對する内在の問題を全體的に解くことは到底出来ないと思ふ。假令兩者を區別するのは抽象の結果であつて、唯一方に於て内容に無關係に妥當する意味形式が純粹論理學の立場から考へられ、他方に於て同一形式が種々の内容と結合することが出来る限り、兩者を區別するのであると云

つたところで、本來兩者の融一が如何にして成立して居るかを理解せしむるには足らない。余は此處にカント並にカント派の立場を補ひ改むべき主要の點がありはしないかと思ふので、今少し詳細に順を追うて考へを進めて見たい。先づカント自身の説に従へば周知の通り感覺の多樣が與へられ、それが時空の直觀形式に於て感性に受容せられて感性的直觀を成立せしめるが、これはそれ自身では本來全く非合理的なるものであつて何等の意味をも有せざるものである。唯其時間的規定が純粹悟性概念の圖式となるに由り、之を媒介として純粹悟性概念に包攝せられ、之に由つて始めて認識の素材としての感覺の多樣或は所謂範疇材料が意味形式たる範疇と結合せられて具體的の意味を有する認識が成立するといふのである。然るに此思想が猶獨斷論の痕跡を脱せざるものであつて、眞に批判主義を徹底するものではないといふ點に鑑み現今の新カント派中リッゲルトの認識論は、一般に與へられるとは與へられたと判斷せられる事であると解し、感覺的內容の所與といふも所與性の範疇といふ如き意味形式を豫想するとして、意味形式に由り合理化せられざる内容なるものを凡て認識論の範圍から排せんとした。實際論理主義の立場から觀て如何なる内容もそれが思惟の對象として云爲せられる限り、何等かの意味形式を豫想し

ないものは無いといふのは正當なる主張であつて、我々は之に反對すべき理由を持たぬ。併し所與性の範疇といふ意味形式に由つて或内容が與へられたと判斷せられる爲めには、先づ斯かる判斷より以前の内容そのものに、其形式の結合可能を保證すべき所以が存しなればならない。即ち所與性の範疇といふ意味形式は或内容が與へられたといふ判斷に於て該内容と結合せられるに先だち其内容に融合内在して居た或ものの顯現でなければならぬ。「與へられてある」といふ範疇の何たるかは其範疇自身に由つて理解せられるのでなく、此範疇を内面的に含蓄する現實の與へられた内容に由つて理解せられるのである。ラスクが *Was „Sein“ bedeutet, ist nur mit Hilfe des Sinnlichen, des Geltungs- und Bedeutungsfremden, nicht aber umgekehrt das Sinnliche durch den Seinsbegriff zu verstehen* (Lask, Log. d. Phil. S. 56) と云つたのは此場合にも當嵌まる。又他の意味形式が決して此所與性といふ意味形式から導き出され、乃至之に由つて理解せられるものでなく、夫々の内容に依存し、本來それ等に内面的に含蓄せられ内在するのでなければならぬことは明白にして疑を容れざる所であらう。感性的直觀に論理的意味形式が如何にして融合内在するかといふ問題は所與性の範疇を掲げるといふ如きことに由つて何等の解釋をも得るものではない。却て此範

疇の適用自身が此問題の解釋を要求するのである。然らば更に進んでコーエンの如く、所謂範疇材料の要素と普通に認められる感覺が與へられるとは實は思惟に對して其質料として與へられることなく、其構成の課題として掲げられることであると解したならばどうであらうか。確にコーエンが *gegeben* 即ち *aufgegeben* と解し、而して微分概念に由り感覺先驗化の原理として内包量の原理に深き意味を與へ、之に由つて思惟の對象生産を説いたのは氏の卓見であつて、殊に數理的自然科学の先驗論理的基礎を明にする上に重要な意味を有することを認めなければならぬ。併しながらリッゲルトの場合に *Gegebenheit* の意味形式は此意味形式に由つて理解せられるのでなく、實際現實意識に於て與へられた内容に由つてのみ理解せられるのであつたと同様に、此場合に於ても『課題として掲げられてある』といふ意味は實際課題として掲げられた内容そのものに由つてのみ理解せられるのであることは疑を容れない。勿論反省を加へない限り、課題の解決に先だつて *Aufgegebenheit* の範疇とでもいふべきものに由り或内容が課題として掲げられてあると判断せられる如きことはないけれども、とにかく課題として掲げられる内容には斯かる意味が其課題の解決に先だちそれに内在しなければならぬことは否定出來ないであらう。而し

て内包量の原理の如きものに相當する意味形式に由つて對象の論理的生産が行はれるとしても、斯かる意味形式が *Aufgegebenheit* といふ如き意味形式から導かれるものでなく、實際に課題として掲げられた内容そのものに本來内在しなければならぬものなることは多言を俟たない。其故コーエンの説に於ても我々は意味形式の意識に内在するとは如何なる事であるかといふ問題の根本的解決を見出す事は出来ぬ。却て其説は已に此問題の解決を豫想し、少くとも之を要求するものなることは疑無い。唯氏の説は認識論の全範圍に對して非常に *furchbar* な深い考を含むものであつて、氏の説を其豫想する前提にまで遡及することに由り、却て我々は當面の問題に對する解決の指針を興へられはせぬかと思ふので、余は尙進んで氏の説の要求する所の豫想を一層深く追及して見やうと思ふ。抑も思惟に對し興へられるとは課として掲げられることであるといふ思想は感覺の先驗化に微分概念を基礎とする内包量の原理を用ゐるといふ特殊の制限を離れて、一般に論理的批判主義に對し重要な意義を有する卓見であるが、併し假令課題として掲げられるにせよ、已に感覺が思惟の構成に規準を與へるものたる以上は、それが課題としての客觀性を含蓄しなければならぬことは否定出來ないであらう。若し然らざれば縱思惟構成の

原理が永久眞理として如何に先驗的なるも、其課題の解決が客觀的であつて、其結果として事實眞理に表はされる客觀的の經驗(自然科學的認識)が成立するとは必ずしも言はれない。於此感覺にも思惟の論理的意味形式と異なる意義に於て客觀性の根據となるべき先驗的の本質が含まれなければならぬことが豫想せられる。カントに於ては感覺は物自體から與へられたものであるといふ理由に由り何處までも其限りの客觀性が認められて居たのであるが、此先驗感覺論の獨斷論的痕跡を脱却せんとして唱へられたコーエンの所與即課題說に於ては、課題として掲げられる感覺に本質としての普遍性が含まれる事を豫想しなければならぬ。此豫想の下に於てのみ課題として掲げられた感覺内容が單に主觀的なるものでなく、其解決に由つて客觀的認識の成立すべき課題であるといふこと、即ち *Aufgegebenheit* といふ意味を含蓄することが出来るのである。課題として掲げられた内容は課題として掲げられると否とに拘らず客觀的に存立する本質乃至其體系が論理的思惟の解決すべき課題となるとき現れるのであつて、それにより *Aufgegebenheit* といふ如き意味を内含することが出来るのである。*Aufgegeben* といふことは已に其掲げられる内容が意識に内面的に對立するものであるといふ意味を含蓄しなければならぬ。本來それ自身

の存立を有するものが課題となるのでなければ、縱令其の解決に役立つ原理が客觀的であるとしても、當該課題の解決が客觀的妥當性を有するといふことは出來ぬであらう。此の點に於ては専ら先驗論理の立場から論理的意味形式を論ずることを以つて認識論の主たる職分とするカント派の立脚地はコーエンの説以上に進むことは出來ないかも知れぬけれども、若し今述べた所が眞であるとすれば、感覺にも其の先驗化の客觀性を保證すべき先驗的の本質があることを認めなければならぬと思ふ。然らば果して感覺に先驗的なる本質があるかといふに、これは已に獨逸派の人々に由つて今まで述べたとは違つた立場から主張せられたことなのである。實は普通に心理學の立場から感覺に關して説かるゝ所のものの半ばは感覺の本質に屬すると云つても差支無いであらう。何故に半といふかといへば感覺の識別に就いて説かるゝ所は何處迄も意識の現實的なる作用に關するものとして實際心理作用に屬するといはなければならぬけれども、併し識別作用を離れて感覺の内容そのものに就いて説かるゝ所は、實は感覺が現に意識せられると否とに拘らず存立するものであるといふ意味を要求する限り、感覺の本質に屬するといはなければならぬからである。例へば色覺に就いて色調、飽和度、明暗の三つの特徴を區別し、其

各の推移を三次元の連讀系列として色覺圓錐に由つて表はす如き、夫々の色が色として有する本質的の關係を目的とするのであり、又音覺に於て種々の調音が音階の示す如き相互關係を有するといふのも夫々の音の本質に關するものに外ならない。之を刺戟の方に着目して物理的の關係に歸するのは斯かる本質を豫想して後に特殊の立場から行はれる客觀化の結果であつて、これが可能なる爲にはそれに先だち右の如き本質的の關係が存しなければならぬのである。凡て感覺の意識に由る識別作用に關するものでなく、感覺内容そのものに與へられる所の諸規定は皆感覺の本質に屬するものであらう。於此我々は常に認識の形式に關する論理的本質即ち思惟の意味形式に屬する本質のみならず、カント以來與へられた質料として全然非先驗的のものと考へられた感覺にも亦先驗的なる本質の存する事を認めなければならぬ。廣くライブニツの永久眞理の思想に基きホルツァーの論理主義に據つて却て非論理的なる感覺の本質を認めるに至つたことは獨塊派の著しき貢獻の一つであらう。マイノングが *Farbengeometrie* とか *Tongeometrie* とか稱したものは皆氏の所謂對象論の一部として、上の如き色覺自體なり音覺自體なりの、現實意識に關係なき本質系統の先驗的構造を研究するものと思はれる (Vgl. Meinong, *Über die Stellung*

der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften. S. 10-13)。[○] 勿論全然非合理的なる感覺自體の本質關係を研究する對象論が果して幾何學に比すべき學の體系を成すかどうかは疑はしいが、とにかく論理の意味形式の外に感覺の本質がマイノングの所謂對象として存することは否定出來ない。『赤いもの』といふ自然認識の立場から論理的意味形式に由つて客觀化せられた經驗的對象とは別に、赤自體といふ現實意識に拘りなき先驗的對象が本質として存立するといふことは重要な意義を有することである。果して此様に感覺も亦先驗的なる本質を有するとするならば、それが論理的本質と同様に所謂本質の普遍性を有することは疑ふべからざることであつて、その内在的となつたものを現實意識に掲げ出だされた課題として思惟が其先驗的なる原理により解決を施すとき、其結果が客觀性を有するものとなるのは當然の事である。コーエンが感覺内容の所與に對して下した深い解釋は我々に、感覺も亦論理的意味形式と異なる先驗的本質を有しなければならぬことを教へた。これは意識せられると否とに拘らず存立する系統を形造るものであつて、その意識せられることにより何物をも附加しないこと、已に述べた論理的意味形式がその意識せられると否とに拘らず妥當するものであつて、或現實の意識内容と結合せられることに

より何物をも附加しないのと同様である。於此曩に我々の問題とした意味形式が本來意識内容に内在するとは如何なることなるかといふ問題は新なる面目を呈露し來ることになる。何故ならば、最初カントの立脚地で意味形式としての範疇に對する質料として、それ自身では *logisch nackt* で *bedeutungsfriend* であり、其意味に於て、*irrational* であると考へられた範疇材料の終極要素としての感覺なるものが、先驗的本質としては意味形式と別種にして而も同等の資格に於ける客觀性を有すること
が明になつた以上、我々は此處に論理的意味形式と意識内容との結合をなす媒介原理の少くとも一端を求められはしないかといふ事が豫想せられるからである。而して現實意識は如何なる場合にも到底感覺要素なしには成立しないのであつて、感覺は實に現實意識成立の *Sine qua non* といふも差支なきものである以上、感覺が先驗的の本質を有するといふことは論理的意味形式の意識内容に於ける本來的内在の問題に對し、非常に重大なる關係を有することは疑を容れないであらう。獨逸派の感覺本質説は實にカント主義の半面を補ふべき使命を有するものであると思はれる。

併しながら翻つて考へると感覺は意識内容の終極要素であり、單純なる感覺はそ

れだけで意識の志向的内容となる能はざる抽象の産物であると認められて居る。カントの感性的直観にしても其質料からいへば終極に於て感覺を要素とするものであるが、現實なる意識内容となるのは時空の直観形式に統一せられた其複合でなければならぬのである。而して直観形式は純粹直観として純粹性を先驗的思惟と共有するものではあるけれども、如何に純粹にせよ單なる直観は論理的意味の立場から見て非合理的なるものであつて、それが認識に參與する爲めには合理化せられなければならぬこと疑無い。即ち感覺と同じく思惟に對しては課題として掲げられたものに外ならないのである。コーエンは豫料をその本質とする時間が一つの範疇であつて、之に由り微分を單位とする多の統一としての内容の生産が可能となり又空間が更にその統一の完成として積分に相當する全の範疇に外ならざることと説き、幾何學が自然認識の Methode なることを力説したのであるが (Vgl. Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, S. 127-170) 併し斯かる範疇としての時間空間の成立する基には矢張課題としての直観的時空が無ければならぬであらう。他日詳論する機会もあるかと思ふが、余は同じく範疇時間といふも歴史的時間と自然的時間とは其概念内容に著しい相違が無ければならず、而して此相違は曩に意味形式の分化が意味

形式自身に由るのでなく其内容に依存すると云つた如く、實は直觀的時間が内在する内容の如何に依存するのであると思ふ。若し夫れ空間に至つてはユークリッド空間を経験的自然界構成の範疇とするか或は非ユークリッド空間を其範疇とするかが直觀的空間に於て掲げられた課題に由つてのみ定まるものなる事は疑を容れざる所であつて、コーエンの立脚地を踏襲するナトルプの三次元ユークリッド空間が經驗の構成的範疇として論理上必然なることを證明しやうとした企が (Naorp, Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften. S. 303-325) 如何なる無理を犯して居るかは嘗て余の批評した如くである(舊稿『幾何學の論理的基礎』參照)。況や今日の相對性原理に見る如く物理的空間の雙關的なること、後者の實驗的のみ定め得べき曲率を有する非ユークリッド空間なることなどは、全く直觀に掲げられた課題の能ふ限り満足なる解決を求めるといふことからのみ理解せられるのであつて、單に思惟の必然からのみは到底理解すべからざることである。コーエンの Gegeben 卽 aufgegeben の説は單に感覺内容の合理化のみに限らず、廣く感性的直觀の全體に擴張せられなければならぬ。感性的直觀は論理主義の認識論にとつては已にカントの説に於て明なる如くそれ自身では全然論理的意味形式を離れたものである。ラスクが das

Bedeutungsfremde, das Wert- und Geltungsfremde を Sinnlich-Anschauliches の一般的稱呼としたものもその爲めである。併し斯様に兩者を峻別して考へるのは抽象的な立場であつて、具體的にはかゝる感性的直觀が潜在的に論理的意味形式を含蓄する所以を示すのが上に縷説した所に由つて知られる如く余の解釋すべき當面の問題である。これは或意味に於てはカントが先驗分析論の中心的部分に於て解かんとした直觀と悟性との結合の問題に外ならぬとも觀られる。余はカントと異なる途に於て感覺にも先驗的なる本質の存することを述べたが、未だ直觀的時空の何たるかには全く説き及んで居ない。そこで先づ感性的直觀の成立如何といふ問題を次節に考へて、順次に現實的意識に於ては本來感性的直觀に論理的意味形式が内在するといふ中心問題に進みたいと思ふ。

六

感性的直觀が如何にして論理的意味形式を本來其内に含蓄するかといふ問題を解決する爲めに、我々は先づ感性的直觀が如何にして成立するかといふ問題を解かなければならぬ。而して感覺が現實意識の *sine qua non* であるといふことが正しい

とすれば、此問題の解決は自ら現實意識の成立一般を明にすることともなるであらう。曩に述べた感覺の本質系統なるものはそれが意識せられると否とに拘らず存立するものたる以上、その意識せられるといふ事が單に新かる本質系統の存立するといふことから理解せられるものでない事は容易に想像出来る。勿論色覺圓錐に由つて表はさるゝ色の本質系統が連續的の體系を成すといふ事は、一つの感覺例へば此場合には一つの色が他の色に對し三次元の系列に於て連續的に推移する傾向を有することを意味するのであつて、逆に一つの感覺が他の同類の感覺に連續的に推移する傾向を含むことに由つてのみ其類の感覺の本質系統が一つの連續體系を成すことが出来るのである。ヒュームが Enquiry の初に觀念の起原を論じて如何なる觀念も其單純要素まで遡るならば、それが感覺(ヒュームの所謂 impression)の模寫に外ならざる事を説くに際し、唯一つの除外例として、同一の色の shades が唯一つを除きて凡て濃淡の順序に呈出せられるとき、假令其缺けたる一つの shade を見たることなき者も想像に由つて之を補ひ、それに相當する觀念を有するに至ることを認めたのも畢竟之に由るのであらう。體系の連續的といふことは其體系の要素が一々動的となり、全體に對する傾向關係を内に含むといふことに外ならない。數學者が連

續集合の本質的要素として掲げる極限要素といひ切斷といふものは、此全體に對する動的關係を含蓄する所謂生産要素を意味するのである。然るに本質系統の要素が動的關係を含む生産要素であるといふことは本質系統そのものがはたらいて自己を生産することであるから、之を其活動の方面から觀るならば其本質を志向的内容とする作用に外ならぬのであつて、連續的なる本質系統は必ず其半面に於て作用を不可分離に含蓄し、連續的本質系統の要素は即ち作用點を意味することになる。

従つて作用はその對應する内容の本質系統の連續的推移の動的半面たるに由り、其作用の本質は之に對應する内容の本質に依屬するといはなければならぬ。畢竟内容といふのは連續的本質系統の靜的方面であり、之に對する作用といふのは其動的方面に外ならない。内容と作用とは同一なる連續的本質系統の相異なる側面に止まり、兩者は全然不可分離の對應關係を有すると考へられる。併しながら一つの本質的要素はその感覺的同類の本質系統の連續體系に於て無限の推移に對する傾向を含蓄する事に由り動的となり、其半面に作用を含むものではあるけれども、此作用が現實にはたらきて實際に意識的となる爲めには、更に可能的に無限なる異類の作用と内面的に結合せられ、他の作用に對する傾向を含み、それを中心とする結合が作用

の可能的結合の全體に於て獨特のものとして限定せられなければならぬ。此處に他の作用といふのは常に感覺の作用のみならず、更に感覺を豫想する高次の表象、假定等の作用凡てを意味するのであつて、別に深き研究を必要とする情意の方面に屬するものを暫く除くも、斯かる廣義の知的作用が内面的に無限の直接結合を可能とするのであつて、その無限なる可能的結合の特殊なるものが凡ての作用を背後に負ひて全體の内に限定實現せられるとき現實意識は成立するのである。此場合特殊化の原理となるのは如何なる作用が結合の中心的位置を占めるかといふ事に外ならない。現實意識は或作用を中心的位置に置きて無限の作用を結合し、此結合を無限に可能なる結合の全體に於て特殊なるものとして限定する所に成立する。斯様に無限なる作用の全體を直接に結合し、更にそれを可能的結合の無限の全體に於て限定する純粹作用が即ち意識の根本としての意志であらう。現實意識は純粹作用たる意志により無限に可能なる作用結合の全體に於て、或作用を中心的位置に置く作用結合が實現せられる事に由り成立するのである。而して本來宛も無限の圓に於ては無限に多くの中心があり得る如く、無限なる作用の結合に於ては無限に多くの中心的位置があり得るのであるから、同じ作用の結合に於ても無限に多くの作用

がそれ／＼中心的位置を占める事が出来る。現實意識は或中心的位置を或作用が占めて之を中心とする作用結合が可能的結合の全體の内に限定實現せられることに由り成立する。その相異なる中心的位置の各に相當する結合の各中心が個人意識である。作用の結合は一定の個人意識を中心とする事に由つて、可能的に結合の全體に於て限定せられ實現せられる。個人意識の相違は無限に可能なる作用結合の全體に於いて或結合が特殊化限定せられる第一の原理である。普通に心理學者が意識の範圍と云つて居るのは個人意識の分化原理としての或中心的位置を占める中心的作用と、それに最も密接に結び附く若干の作用とに相應する所の志向的内容の全體を意味するのであつて、實は更に此所謂意識の範圍の周圍に無限の作用に相應する内容があり、所謂意識の背後には所謂無意識の無限が存するのである。一つの個人意識に對して此所謂無意識に屬する作用を自らの所謂意識範圍に含み、相異なる中心に由つて他の個人意識は成立するのであつて、實は凡ての個人意識が同じ作用結合の中心の相違により限定せられつゝ、全體の結合をなす粹粹作用に統一せられるのである。而も純粹作用に由る全體の結合は斯かる部分的の中心の範圍を通じて限定せられることなしには實現せられる事が出来ないものであつて、個人意識の

外に之と離れて全體的普遍意識といふべきものがあるのではない。全體的意識は凡ての個人意識をその中心とし、後者の所謂意識範圍の背後に横たはる無限の無意識を統一する無限の圓に比すべきものである。此同じ圓の夫々異なる點を中心として同じ作用結合の全體に屬するものたるところに、個人意識の相互交通乃至意識一般の實現可能の根據が存するのであらう。ライブニッツが無限に多くの相異なるモナッドを、凡て同一の宇宙を異なる視點より表象するものと説いたのも右の如き意味に解することが出来ると思ふ。而してモナッドの本性がはたらく力であり、其根源たる神が *actus purus* であるといはれて居るやうに、意識の根本は純粹作用としての意志である。此純粹作用に由り一つの結合は其中心を變ずる事に由つて更に無限に新なる結合に推移する事が出来るのみならず、一度なされた結合は其結合の各中心に於て消えざる閱歷として爾後の結合に要素となる作用を所謂記憶に於て供給し、かくて持續と創造との兩面を具する作用結合の發展が生ずる。此處に意志の純粹作用は其はたらきの實現に必要な作用結合限定の第二の特殊化原理たる發展段階の相違に由つて現實意識を成立せしめるのである。前に述べた作用結合の中心的位置の相違といふ第一の特殊化原理は此結合の發展から抽象して、單に同一發展段

階の意識が特殊化せられる所以のみを示すものに外ならない。而して此純粹作用に由つて結合せられる作用は曩にも述べた如く決して單に感覺の連續的本質系統の動的側面としての所謂感覺作用に止まるものでなく、更に感覺を豫想する高次の表象或は假定等の作用をも含むのであるが、併し此等の作用も現實意識の作用としては必ず其志向的内容に感覺を直接或は間接に豫想するのみならず、それ等が意識せられて現實の内容となる爲めには、必ず所謂意識範圍の内に於て感覺と結合せられる事を必要とする。感覺が現實意識成立の *sine qua non* であるといふのは之を謂ふのであつて、所謂感覺作用の結合を中心的範圍の内に含む事なしに意識の成立する事はないのである。純粹作用としての意志は意識の根本ではあるけれども、*ブイヒ* の *absolute Thesis des Ich* に於ける如く、そのみで現實の意識を成立せしめる事は出来ない。*Ich* と獨立にそれ自身の存立を有する *Nicht-Ich* としての感覺の本質系統を俟つて兩者の相互的制限としての *Synthesis* により現實意識は成立するのである。それと同時に感覺の本質系統も其連續性により動的作用をその半面に含蓄するとはいへ、その本質系統は論理數理の本質系統と同様永久眞理の對象として單に可能的たるに止まる。それが事實眞理の對象となる現實意識の内容を成立せしめるに

は作用の可能的に無限なる結合の全體に於て限定せられ、全體的普遍的なるもの特殊化として個性を有するのでなければならぬ。凡て現實的なるものは個性的であり、個性的なるものは全體に對する關係を含みて之を表現する特殊でなければならぬのである。現實意識の結合の中心として限定の原理となる個人我は、それ自身何等の限定を有せざる純粹我の特殊化であつて、又此個人我を離れて純粹我が現實となることはない。直接に體驗せられる現實意識が *Ansichsein* に於ける意識一般であるといふのはその純粹作用、或は所謂純粹事行の契機に就いていはれることであつて、それは必然意識一般に對し *Anderssein* たる個人的限定の契機を現はさすには居られない。此純粹事行としての意志と感覺の本質系統純粹我と非我との相交渉する所に現實意識は成立するのである。ボヘメが大初の意志は永遠の無と認めらるべき *Ungroundedness* であり、それは存在すると同時に存在せざるものであるが、而も生を形造る *essences* の動力なるが故に生の根柢であると考へ *Thus life is the essences' son, and the will, wherein life's figure stands, is the essences' father.* (Böhme, Six Theosophic Points. Earle's tr. p. 6) と云つたのは意味深いことと思はれる。

今述べたやうな意味に於て凡ての現實意識の *rudiments* とも考へられる感覺の意

識を縦に統一する内面的關係が直觀的時間であつて、之を横に統一する内面的關係が直觀的空間である。併し此處に所謂縦とか横とかいふ比喩的の語は何を意味するか。已にカントに於ても、單に純粹直觀といふ點から觀ては同じであつても、其認識的意識全體に對する關係から觀れば重要な相違を有すると認められた直觀的時間と直觀的空間とは果して如何なる差別を有するか。所謂時空の先驗的觀念性は何れの場合にも終極の眞理を表はすか。此等の問題は感性的直觀の成立、それ^に對する意味形式の内在を理解するに重要な關係を有するのであつて、更に精しく考へて見なければならぬ。直觀的時間が感覺的意識を縦に統一する内面的關係であるといふのは、曩にも述べた如く感覺の本質の動的方面としての作用が無限に可能なる結合の全體に於て限定的に結合せられることにより現實意識を成立せしめた以上、それは決して消滅することなき永久の閱歷となり、爾後の意識成立に對する要素として存續し、新なる意識は之に對應する記憶作用を含んで更に新なる作用結合の無限に可能なる全體の中に限定せられた特殊の作用結合として成立する、此持續と創造との兩面を含む所の意識發展の内面的關係を謂ふに外ならぬ。此關係に由り或意識内容は過去の内容を擔ひ之を含みて更に新なる内容の創造をなす創造

36

的進化の過程に現れ、其内面的關係は所謂純粹持續をなすのである。之を現象學的立脚地から觀るならば、ブツツールのいふ如く全然計量を絶するものとしての現象學的時間となるのであらうが、余は前節に述べた當面の問題に鑑み之を直觀的時間と名けたい。直觀的時間は純粹作用たる意志により諸感覺本質系統の半面に含蓄せられたる諸作用を始め凡ての作用の結合が一つの結合から他の結合に純粹持續的に發展する内面的關係であつて、而も未だ反省を含まざる直接の現實意識に於ては内容と作用とは不離の兩面をなすものであるから作用結合の内面的關係たる直觀的時間はやがて意識内容そのものの内面的關係ともなるのである。これは本來 ideal な感覺の本質が real な意識内容となる爲めの一制約であつて、而も直觀的時間が其意識内容の内面的關係になるのは實は意識の成立が直觀時間的たるに由るといふべきであらう。ナトルプの如きは時間を以て意識内容の形式となし、意識が時間の内にあるのではなくして、時間が意識の内にあるのであるといふ事を力説して居るが (Natorp, Op. cit. S. 252) 右の如く考へるならば寧ろ時間が意識に於て成立すると同時に意識そのものが時間に於て成立する、兩者は不離の關係を有し意識の發展、意志の過程が直に直觀的時間を其内面的關係として含むのであると云べきであらう

成程ナトルプの言ふ如く過去と未來との兩様の Nicht-Jetzt を Jetzt と結合するものとしての Zeitbewusstsein は zeitlich でなく überzeitlich であるといふべきであらうけれども、時間は單に意識内容の内面的關係に止まるものとせず、意識そのものを成立せしむる作用結合發展の内面的關係であつて、それがおのづから作用に對應する内容の發展に含まるゝ内面的關係となることを考へ、(ツィッターセークは Zeit des Vorstellens がやがて Zeit des Vorgestellten に導くといひつた。Vgl. Wisasek, Grundlinien der Psychologie. S. 218 過去と未來とを現在と分別して過去の後に現在があり、現在の後に未來が來るとせず、現在は過去を負ひて未來を孕むとするならば、意識が超時間的であるといふことを時間に無關係といふ意味でなく、不斷に發展する現在といふ意味に解する限り、それと意識が自ら時間的であるといふことと矛盾はしないと思ふ。我々は後に繼起の形式となる範疇時間の基として、それ自身は不斷の現在として發展する意識の内面的關係として直觀的時間なるものを認めなければならぬ。此意味に於て時間の先驗的觀念性の基には先驗的實在性があるといはれる。

然らば之に對し直觀的空間が感覺的意識を横に統一するとは如何なる事であつて、又それは直觀的時間と如何に關係するのであるか。直觀的空間にも先驗的實在

性があるであらうか。余は空間につきても何等かの意味で先驗的實在性を有する直觀的空間といふべきものを認めなければならぬと信ずる。勿論直觀的空間といふも果してそれが直觀的時間と同様な意義を感覺的意識に對して有するかごうかは下に試みるやうな分析を俟つて始めて決せられる事ではあるが、とにかく後者が繼起の形式としての範疇時間の基に豫想せられたる如く前者が同時共存の形式としての範疇空間の基に豫想せられなければならぬ事は否定出来ないと思ふ。然らざれば、經驗的空間は成立せず、又幾何學的空間を純粹思惟の對象としての抽象的なる多次元無限連續集合から區別する根據は無くなるであらう。今日新カント派に屬する純粹論理主義的認識論者は先驗分析論を重んじて先驗感覺論を輕んじ、時間空間を悟性の範疇として純粹論理的に規定しやうとするのであるが、余は單なる論理的の無限連續的の一次元系列、或は多次元體系から區別して時空を時空たらしむる根據は、前節に述べた如く思惟に對する課題としての直觀的時空、即ちカントの所謂純粹直觀としての時空に之を求める外無いと思ふ。勿論カントの先驗感覺論に批判主義と相容れざる思想を含み、又先驗感覺論が先驗分析論から分離せられ過ぎたといふやうな缺點のあることは否定出來ないけれども、範疇としての時空の基に

純粹直觀としての時空が無ければならぬことは疑を容れる餘地の無い事であると思ふ。併しながら直觀的空間といふのは如何なるものであらうか。之と直觀的時間とは如何なる本質的の相違を有し、又相互如何に關係するか。カント已に、先驗感覺論に於ては時空を同格的に竝立する純粹直觀と認め、單に前者が内官の形式たり後者が外官の形式たるを異にするのみとしつゝも、先驗分析論に於ては内官の形式としての時間は空間と異り、*in jeder empirischen Vorstellung des Mannigfaltigen enthalten ist* (Kant, Kr. d. r. V. II. Auf. S. 178)なるが故に先驗的圖式として感性的直觀と悟性の範疇との媒介をなすものであると見做し、經驗的認識の成立に對して重要な相違を有することを認めて居る。余は斯かる點を念頭に置きて直觀的空間の何たるか、其感性的直觀の成立に對する意義、直觀的時間との相違、交渉等に就き現在懐く所の未熟なる考を次に述べて見やうと思ふ。心理學者は視覺に於て眼の網膜に、觸覺に於て皮膚の表面に所謂局所徵驗なるものがあり、それに由つて同一の光や觸の刺激も異つた徵標を帯び、これが視覺的乃至觸覺的空間の表象構成に要素となると説く。此心理學者の教へる所は勿論生理的心理學といふやうな自然的客觀化の立場から下す解釋として正當なるものと認めなければならぬであらう。併しこれは解釋で

あつて斯かる解釋を要求する根本の事實は同一の光覺や觸覺も夫々後に空間的位置の相違として客觀化せられる獨特の徵標を帯びて意識せられるといふことに外ならない。斯かる徵標は光覺色覺の本質或は觸覺の本質そのものとは少くとも或範圍の獨立性を以て自らそれ／＼の感覺的 Region に固有なる連續的の本質系統を形成すると認められる。但し此處に徵標といふのは始めて所謂局所徵驗の説を唱へたロツェの考の様に刺戟の與へられる局所に從つて夫々異なる Bewegungstendenzen が光色覺觸覺等に結合するといふ意味に於てでなく、光色觸の感覺そのものが斯かる Bewegungstendenzen の結合を俟たず、それ自身に verschiedene Ortsbestimmung を伴ふといふ意味に於てである。ツィタセークの説く所は斯かる徵標を心理學の立場から觀たものと思はれる (Witasek, Op. cit. 175-176)。所謂 Theorie der komplexen Lokalzeichen を唱へたゾントの如きも明に die qualitativen Unterschiede der Netzhautempfindungen, die vom Ort des Eindrucks abhängen (Wundt, Grundzüge d. physiol. Psychologie. II. S. 718) を所謂 Bewegungstendenzen と離れて獨立に認めて居ると思はれる。而してツィタセークの所謂 Orts-empfindung (s. 176) として斯かる徵標の意識せられることを認める以上、一般に感覺の各 Region に夫々本質系統を考へる立場から空間的徵標にもその本質系統を考へ

るのは當然のことといはなければならぬ。是れ後に思惟の構成に由つて解決せらるべき課題の内容を成すものであつて、従つて前に普通の感覺に就いて述べた如く課題としての客觀性を有しなければならぬからである。尙此空間的徵標の本質系統なるものは、常に普通局所徵驗の説かるゝ視覺や觸覺のみならず、他の凡ての感覺についても、夫々著しく相違するものではあるが、とにかく各々固有なる系統として隨伴するものではないかと思はれる。音や香の定位として我々が客觀化するものの基となるのも、矢張夫々の感覺に固有なる空間的徵標の本質系統に屬するものではあるまいか。勿論此問題を個々の感覺に就いて實驗的に研究し夫々の感覺の質の本質系統と此空間的徵標の本質系統とが如何なる關係を有し、後者が前者に對し如何なる範圍の獨立性を有するかといふ如き問題を決定するのは、心理學の業に屬することであつて、今余の企及する所ではないが、余はとにかく如何なる感覺の Region にも其質の方面に屬する本質系統の外に其 Region に固有なる空間的徵標の本質系統なるものが備はり、それが前者とは獨立に存立して前者の種々なる内容に一般的に對應し得るものではないかと思ふ。斯かるものを認めなければ、心理學者の局所徵驗を本として空間表象の成立を説明する企も、其依つて立つべき根據を失ひはし

まいか。但し此處に唯一つ除外例ともいふべき感覺の Region があると思はれるのは所謂運動感覺である。他の感覺の Region に於ては質の方面の本質系統と空間的徵標の本質系統とは少くとも或程度の獨立性を有するものであつて、例へば一つの色に種々の空間的徵標が隨伴する事も出來れば逆に種々の色が順次に同一の徵標を隨伴することも出來るのであるが唯一つ運動感覺のみは斯かる獨立性を有する二種の本質系統を區別することを許さず、所謂質の方面の本質系統ともいふべきものが即ち空間的徵標の本質系統と一致するのである。我々は本質上諸種の感覺的 Region に固有なる空間的徵標體系の連續性が其體系を動的にはたらかせて作用を其半面に含み、而してそれ等の作用が互に結合して體系そのものの聯合をなさしめ、夫々の要素が相互對應の關係に於て意識せられることを認めなければならぬが、此聯合の中心となり、他の感覺的 Region の空間徵標體系をして相互聯合せしむる媒介となるのが即ち今述べた特異の性質を有する運動感覺に外ならない。心理學に於て空間表象の成立を説くに視覺や觸覺の局所徵驗が運動感覺に聯合し、運動感覺が知覺的空間の中核をなすものであるといはれることの本質的根據は此點にあるのであらう。之に由つて夫々の感覺の Region に固有なる空間的徵標の本質系統が運

動感覺の本質系統の表はすものの特殊的部分といふ意味を内含することも出来るやうになる。余は右の如き意味に於て運動感覺を中心として聯合する空間的徵標の本質系統なるものが凡ての感覺的 Region に屬し、それ等に相當する作用が運動感覺の作用を中心として相結合せられ、更に作用の無限なる全體に於て現實となる場合に、其作用の志向的内容として意識せられたものを直觀的空間といはうと思ふのである。斯かる直觀的空間が如何なる感覺の意識にも必ず隨伴し、而して感覺内容の質と獨立にその相違に拘らず本質的普遍性を維持して種々の場合に同様に意識せられる所から、直觀的空間は感覺的内容が意識せられ、感性的直觀が成立するに缺けることの出来ぬ一般の必要條件と考へられる。カントが空間を直觀の成立に缺くべからざる要件と見做し、其中に如何なる對象もなしと思惟することは出来ても、空間なしといふことは表象し得べからざることであると説いたのは、直觀的空間が如何なる感覺の意識せられるにも必須なる一般條件であつて、而もそれ自らは意識せられる感覺の質と少くとも或程度の獨立性を有することを意味すると解することが出来るであらう。併しながら單に直觀的空間が如何なる感覺内容の意識にも隨伴し、而も其内容の特性と或程度の獨立を保持するといふことだけで、直觀的空間

間を感覺内容の意識せられるに必須の形式であるといふことが出来るとは思はれない。今視覺の場合をとつて考へると、同じ空間的徵標の體系に種々の色の系統が要素の對應關係に於て結合することが出来ると同時に、他方に於ては同じ色の系統に種々の空間的徵標の體系が同じく要素の對應關係に於て結合することが出来るとするならば、單に此對應的結合だけで空間が色の意識の直觀形式であるといふことはいはれまい。若し唯兩者の關係が之に止まるならば、我々は反對に色の系統が空間的徵標の意識せられる形式であるといふことも出来る筈である。然るにそれが左様でないとするならば空間的徵標が色覺或は一般に如何なる本質系統とも異なる獨特の意義を感性的直觀の成立に對して持ち、所謂直觀形式として之を解すべき理由を有するのでなければならぬ。果して此の如きことがあるか。余は此問題に對する解答を、現實意識の成立には必ず作用の結合が一定の個人意識を中心とすることに由り、可能的結合の全體に於て限定せられなければならぬといふ根本事實の内に發見し得はしないかと思ふ。現實の意識は曩に述べた如く或作用を中心的地位に置きて無限の作用を結合し、其作用と之に最も密接に結び附く若干の作用に相應する内容を所謂意識の範圍に持ちつゝ、更に其周圍に結合する無限の作用に相應

する内容を所謂無意識として無限の背景に有する所の夫々の個人意識を通じてのみ可能となるのであるが、此個人意識の分化原理として作用結合の相異なる中心的位置といふものを認めなければならぬ。此中心的位置の體系が所謂空間的徵標の系統であつて、後者が運動感覺の本質系統を其根本要素とするのは、前者の體系に於て一つの中心的位置より他の中心的位置に對する移り行きを運動感覺の本質が意味するからであらう。ライブニッツが各モナドは同一の宇宙を相異なる視點より表象するのであると云つた、その相異なる視點とは即ち作用結合の無限に多き中心的位置を謂ふと解せられる。余は斯かる中心的位置の各が其全體に於ける定位關係を含むものとして、無限に可能なる作用結合の現實的中心となり、之に依存する個人意識の各が其全體に對する關係を表はす事により現實意識を成立せしめるのであつて、其爲めに空間的徵標が本來は他の感覺の本質と同様本質に屬するものにてありながら、現實意識成立の不可缺條件として直觀的空間なる直觀形式となるのではないかと思ふ。此直觀的空間に於て現實意識成立の必須條件たる個人意識の限定が可能となるのであつて、又其内に於て作用の實際に結合せられる結合中心點が與へられるのである。余は此意味に於て直觀的空間が單に感性的意識の形式に止まるもの

でなく、同時に現實意識成立の根柢、作用結合の場面といふ意味を含むものとして、其限り intelligibler Raum ともいふべき意味を含むことを認めなければならぬと思ふ。勿論此様な intelligibler Raum としての直觀的空間は同時共存の要素點の外延量的延長などといふことは出來ない、全然内面的なる現實意識の個人的分化關係を意味するのであるが、併し斯かるものなしには現實意識は成立することが出來ず、外延的空間も不可能となるであらう。一方に於て單なる本質としての感覺の諸系統があり、他方に於て純粹作用としての意志がある場合に、自ら空間的徵標の本質に基くと同時に意志の作用結合に必然の制約となる結合の限定、個人意識の分化をなさしめる直觀的空間は直觀的時間と相俟つて本質と現實、永久真理と事實真理との結合の媒介者となる。批判主義の立場から觀るならば、時空は先驗的觀念性經驗的實在性を有するに止まるが、直觀の時空としてはそれは内在的にして同時に先驗的實在性を有するといはなければならぬであらう。

併しながら翻つて考へると直觀的空間と直觀的時間とは假令其内在的にして同時に先驗的實在性を有するといふ點に於て同様であるとしても、兩者の意識成立に對する意義は決して同一視する事を許されない。既に前に述べた如く直觀的時間

が意識内容の内面的關係を表はす直觀形式となるのは、諸感覺作用の結合が純粹持續的に發展する場合、未だ反省を含まざる直觀の段階に於ては内容と作用とが不離の兩面をなすにより、本來意志の作用結合の内面的關係たる直觀的時間が同時に該作用に對應する内容の内面的關係ともなるに由來するのであつても、時間意識内容に屬するといふよりも意識の根本たる純粹作用としての意志に屬するもの、それは本質系統を含まず飽迄純粹作用のはたらきに含まれるものなのである。然るに直觀的空間は成程意志の作用結合が現實となる制約には相違ないけれども、純粹作用そのものに含まれるといふことは出來ず、本來空間的徵標は本質系統を成すのであつて、意識作用を離れて存立するものなのであるから、意識に對する關係に於てはそれは直觀的時間に比し或意味に於て疎遠なることを免れない。之に由り一方に於ては直觀的空間も現實意識の直觀形式となる爲めに直觀的時間を豫想しなればならぬと同時に、他方に於ては直觀的時間から抽象して考へるとき、直觀形式としての直觀的空間は其空間徵標の本質系統に由り、無時間的に存立する概念的空間の構成に對する課題となることが出來るのである。これが直觀的空間の感覺的意識を横に統一するといふことの意味に外ならない。加之直觀的時間も意識の作用

と獨立に妥當する概念的時間の構成に對する課題となり得るが爲めには、自ら本質系統を有せざるに由り直觀的空間に對應せしめられ、後者の本質系統を藉りて客觀化せられなければならぬ。併し同時に何處迄も意志の純粹作用に屬せず、感覺の本質系統と同様單に可能的なる永久眞理の對象となる空間的徵標の本質系統が現實化せられたものに止まる所の直觀的空間は、その現實化の爲めに直觀的時間を豫想しなければならぬのであつて、之を俟たずに意志の純粹作用に關係することは出來ない。空間的徵標の根本となる運動感覺は唯直觀的時間に由つてのみ現實化せられるのである。直觀的空間を直觀的時間と獨立に考へるのは抽象の結果であつて、現實には直觀的時間に於ける動的發展の内面的關係を通じてのみ直觀的空間が意識せられる。此處にカントが先驗的圖式の役前を演ずるものとして意識の綜合に對し獨得の位置を與へた直觀的時間の直觀的空間とは異なる根本性が存する。普通に通に時間は意識の成立に對し不可離の關係を有すると認められるに反し、空間は意識成立の必要條件と考へられて居ないのも之が爲めであらう。併し曩に述べた如き意味に於ては直觀的空間も作用結合の實現せられて現實意識の成立するに缺くべからざる條件となるのであつて、*an sich*には意識一般といふべき直接意識が實は

之に對し *Anderssein* といふべき個人意識への限定を内含するものとしてのみ現實となるのも直觀的空間に依ると思はれる。而してフヒテの *Thesis des Ich* がそれのみでは現實となることが出來ず、現實となるには *Antithesis des Nicht-Ich* を豫想し、兩者の相互的制限としての *Synthesis* に入らなければならぬといふ場合の非我は、曩に唯感覺の本質系統を意味すると解せられたのであるが、今や感覺と同じく本來は本質系統に屬し、而も同時に意識實現の根本制約となる個人意識分化の原理たる空間的徵標系統こそ非我であると解するのが一層適切ではあるまいか。之に由つて我と非我との相互制限は同時に個人意識の分化となり、現實意識成立の由來が一層明にせられる。余は感性的直觀乃至現實意識の成立を大體右の如くに解したいと思ふのである。(未完)